

テルトゥリアヌスとストア主義

— 魂に関する議論を中心として —

津 田 謙 治

1.1. 問題設定

「アテネとイェルサレムに一体どのような関係があるのか」⁽¹⁾ という有名な文言が示すように、古代の反異端教父テルトゥリアヌス（160頃-220頃）は哲学とキリスト教の立場の分離を主張していた。またこのような主張だけでなく、彼はヴァレンティノス派やマルキオン派などの異端と哲学の関係を強く指摘し、哲学的思考こそが異端の発生する温床であるとまで述べている⁽²⁾。

しかし他方で、質料や肉体だけでなく、魂、霊、そして神までもが物体（corpus）であると捉えられる彼の思想は、ストア的唯物論を抜きにして理解することは困難である。哲学を否定しつつ、哲学的思考に依拠するという矛盾した彼の姿勢は、神と被造物としての人間、また神と御子及び聖霊との関係を論じる際にも顕著となっている。本稿では、「魂」論を中心としてテルトゥリアヌスにおけるストア主義的文脈を分析し、それがどのように彼の神学的議論の形成に寄与しているかを考察する。

1.2. 『魂について』と概観

テルトゥリアヌスの魂論を分析するにあたって、ここでは彼の『魂について（*De anima*）』⁽³⁾ を中

心として用い、適宜他の著作を参照することとしたい。本書の書かれた年代は定かではないが、モンタノス主義に彼が転向した207年前後の作品のように考えられている⁽⁴⁾。事実、魂の特性を説明する過程で、彼は本書でもモンタノス主義の女預言者の話を挿入している⁽⁵⁾。

『魂について』という著作は、彼と同時代の異端者ヘルモゲネス（生没年不明：二世紀末に活躍）に向けられていることが書物の冒頭で述べられている。ヘルモゲネスは神と質料という二元論的世界観を展開し、魂は「（神の息吹というよりも）質料に由来する」⁽⁶⁾ と説いていた。本書はこの教説の論駁を目的としているようであるが、実際には哲学者の思想全般に向けられている。テルトゥリアヌスは漠然と哲学全体を批判したのではなく、30人以上にも及ぶ哲学者の名を具体的に挙げて⁽⁷⁾、彼らの誤謬を容赦なく指摘している。しかし、それは単に聖書の立場から哲学的教説を批判するのではなく、ある哲学（ストア派）の立場に身を置いて別の哲学を論駁する姿も多く見出される。

2.1. 魂の起源

魂とはテルトゥリアヌスにとって永遠なものではない。プラトンとは明確に異なり⁽⁸⁾、キリスト教において魂は神によって「造られた」ものであり、始まりを持つものと見なされねばならない。

個々人の内に存在する魂は、神の息吹としての最初の魂、即ちアダムを通じて伝遺した要素を受け継いでいる⁽⁹⁾。この魂には二つの性質が包含される。

一つ目の性質は、神の息吹として、神によって形造られた⁽¹⁰⁾要素である。創世記二章七節の記述に基づいて、「人間は主の息吹によって生ける魂とされた」⁽¹¹⁾と彼は理解している。しかし、このことから、神的な要素が人間の中に内在すると捉えることには慎重にならなければならない。

「しかし我々は、(プラトンの魂のように)神に付属するものは認められないのであって、まさにこの事実から、魂が神のずっと下方のもの(longe infra deum)であると見なすのである。魂が生まれたものであり、弱まった神性と希釈された至福を持っていることを我々は知っているが、それは神の霊(spiritus)ではなくて息吹(flatus)である。また、魂が神的存在であるが故に不死であっても、それでも魂は受苦するもの(passibilem)である。魂は生み出されたという状態に従って、最初に持っていた能力から逸脱し(罪を犯し)、誤りやすいのである」。(『魂について』24, 2)

過ち、忘却し、躓く我々の魂は、神と等しいものとは見なされない。テルトゥリアヌスは極めて希薄な神的存在(divinitas)要素を魂に認めるのみである。人間の魂は、既に最初の人間アダムにおいて罪を犯している。

二つ目の性質として、このアダムの罪を我々は魂の中に引き継いでいる。「蛇の誘惑(ex serpentis instinctu)」⁽¹²⁾によってアダムが行った神への背反行為は、我々の魂の中に非理性的(irrationale)な要素として受け継がれている。

人間の魂は、このように神の息吹としての理性的(rationale)な側面と、アダムの罪という非理性的な側面との両方を、その起源として備えているのである⁽¹³⁾。

2.2. 魂の性質

しかしながら、上記における魂の二つの側面は、二つの「部分(partesもしくはmembra)」⁽¹⁴⁾と理解してはならない。魂は「単一」であって、部分に分割されないからである。

「魂は唯一(singularis)で更に単一(simpliciter)であり、それ自体で全てである。また魂は、分割出来ないのと同様に、何かから構成されているのでもない。というのも、魂は分解できないからである。もし魂が何かから構成されていて、分割できるとすれば、もはやそれは不死ではなくなってしまう。従って、魂は可死的ではない故に、分離も分割も出来ないのである」。(『魂について』14, 1)

ここでのテルトゥリアヌスの言説は、魂が部分から構成されているにも拘わらず、不死もしくは永遠であると捉えようとする哲学に対して向けられている。彼の理解に拠れば、部分の結合による構成物は、いつか分離されて、不死性を得ることはできない⁽¹⁵⁾。しかし、プラトン、ストア派⁽¹⁶⁾、アリストテレス、そして多くの哲学者たちは、魂の永続や永遠性を主張しながらも、魂は多くの部分から構成されると説いている。彼によれば、ストア派のゼノンは魂を三つの部分から構成するものと捉え、同じストア派のクリュシッポスは八つの部分、ポシドニオスは十四の部分から成るとした。ストア派に多く共通する魂観では、「ヘーゲ

モニコン (*ἡγεμονικόν*)⁽¹⁷⁾、即ち一つの「統轄的部分」が、感覚などを含む他の七つの部分を管理下において、主導的な力を持つと捉えられた⁽¹⁸⁾。テルトゥリアヌスは、これらの諸部分の役割については批判をしておらず、これを魂の実体的な部分としての構成要素ではなく、運動や思考などを行う魂の機能や特性 (*ingenia*) として見なそうとしている⁽¹⁹⁾。

2.3. 魂 と 霊

魂 (*anima*) と霊 (*spiritus*) の関係について、テルトゥリアヌスは当時流布していた概念、即ち魂が生命活動を担い、霊が呼吸の役割を担うという仮定に基づいて議論を展開している⁽²⁰⁾。仮にこの前提に立つとしても、彼は「霊と呼吸が魂にとって付加的なもの」⁽²¹⁾と捉えている。例えば「蟻などの小さな被造物は肺に相当する器官を欠いており、呼吸即ち霊なくして生きている」⁽²²⁾からである。他方で人間に目を向けるならば、人間は霊と魂の両方を備えているように見える。人間が呼吸をしている限り、生きていると捉えられるのであるから、霊と魂は生命活動という観点からは、分離し、区別することは不可能である。この点から、テルトゥリアヌスは両者を一つの実体と捉えようと試みる。

「しかし、この(霊、即ち呼吸の働き)を、我々は魂に属すると主張するのである。この魂が単一 (*uniformis*) で純一 (*simplex*) であるということ将我々は知っており、その状態の名称ではなく、その動きによって、またその実体 (*substantia*) の名称ではなく、その働きという確実な状況から、我々は魂を霊と呼ばなければならない。というのも、魂が呼吸しているの

であって、それは呼吸が霊に固有のものではないからである」。(『魂について』11, 1)

既に見たように、魂は単一であるが故に、分割することは出来ないし、様々な部分から構成されるのでもない。従って、霊は一つの実体として魂という実体と結合しているのではなく、両者はその役割によって付された二つの名称であって、それらが指し示すものは一つである。

しかし、魂と霊が同一のものであるならば、一つの問題が生じる。聖書の記述に従って、神の霊が息吹となって人間の魂となったのであれば、神の霊が罪を犯し得るものと理解される余地が出来てしまう⁽²³⁾。テルトゥリアヌスはここで先の魂の非理性的な要素に関する議論に補足して、魂は聖書的な意味での霊、即ち神の霊ではなく、呼吸と見なすべきであるとしている。彼に拠れば、聖書では明確に神の聖霊と魂を区別しており、使徒たちが述べているように⁽²⁴⁾、人間は最初から霊的なものとして造られたのではなかった。神の聖霊は人間が生命を持った後に、人間に宿るものであって、それが場合によっては預言というかたち⁽²⁵⁾で顕れるのである。

2.4. 魂と肉体

魂と肉体は同時に形成され、全く同時に共に生まれたものとテルトゥリアヌスは理解している。ここでは、プラトンやオリゲネスにおけるような魂の先在は否定される。神の許に留まる魂が肉体に入ってくるのではなく、魂と肉体は共に在り、この状態が生であるとされる。テルトゥリアヌスは魂の種子と肉体の種子が別々のものであることを認容するが、これらは不可分であって、両者が分離するのは死の瞬間である⁽²⁶⁾。

プラトンでは肉体を魂の「牢獄 (carcer)」と見なすが、キリスト教徒にとって、それは使徒パウロが伝えているように「神の神殿 (dei templum)」と見なされる⁽²⁷⁾。テルトゥリアヌスの肉体に関する議論は、聖書に即して進められているが、そこにはある種ストア派と結び付いた独自の思考と並行している側面がある。彼にとって、肉体は魂に付随的なものであって、それは魂の容れもの、器 (calix) に過ぎない⁽²⁸⁾。肉体に固有の特徴は強く見出されず、むしろ魂に対して消極的に位置付けられている。それは、人間の罪と肉体の関係に関しても同様である。

「従って、聖書によれば肉に罪が帰せられる (inrepatur)。というのも、情欲、食欲、酩酊、残虐、偶像崇拜その他の感覚的ではなく肉的な行いは、肉体なしに魂だけでは行えないからである。(しかし)、実際に罪を起こす感覚 (sensus delictorum) は、(肉体の) 作用の結果でないとするれば、魂に (その責があると) 見なすのが常である。(まさに聖書が述べている通り) 『みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中で姦淫を犯したのである』」⁽²⁹⁾。(『魂について』 40, 3-4)

テルトゥリアヌスにおいて、罪の主体は肉体よりも魂の方に置かれている。確かに罪となる行為は肉体なしには起きえないが、その罪の責任は肉体を動かす魂の方に向けられている。ここにおいても、魂が肉体を動かし、衝動⁽³⁰⁾ さえも管理下におくというストア派の議論の影響を見出すことが可能であろう⁽³¹⁾。

また、彼は魂が肉体と共に「成長」するものと理解している。彼自身が当時の医学の権威と見なしたソーラヌスという人物は、魂が物的栄養物

で養われると論じ、テルトゥリアヌスもこれに同意している⁽³²⁾。但し、アウグスティヌスが指摘しているように⁽³³⁾、この魂の「成長」は、肉体のように物理的な拡大を意味しない。それは魂の「力の発展」を意味し、幼児と老人では魂の発展の度合は異なると彼は論じている⁽³⁴⁾。

このように彼は、魂が生る過程において肉体から影響を受けることを否定しないが⁽³⁵⁾、肉体と魂が混ざり合うことに関しては明白に否定していた。この議論は彼のキリスト論において展開されており、そこではキリストの肉と魂が混合したとすれば、それは何か第三の実体のようなもの (aliud ... tertium) となり、もはや神とは呼べなくなると彼は論じている⁽³⁶⁾。

2.5. 魂の物体性

テルトゥリアヌスにとっては肉体だけでなく、魂も物的なものとして捉えられる。魂が非物的であると説くプラトンに対して、彼は明白にその誤りを指摘している。「(物質的な) 実体」、「受苦」、「運動」という側面から、魂が物的であることが論じられる。

魂が神の息吹という「実体」から造られたものであるという議論は既に確認した。テルトゥリアヌスに拠れば、こうした考えは、プラトン以外の哲学者たちにも共有されており、「水」から魂が造られたと説いたタレース、「火」からと説いたヘラクレイトス、「原子」からと説いたエピクロスなどが挙げられる⁽³⁷⁾。彼らよりも明確に魂の物体性を論じたのはストア派であって、彼はゼノン、クレアンテス、クリュシッポスの名を挙げて、肉体と魂が共に物体であるが故に、魂が受苦することが可能であると捉えている⁽³⁸⁾。この議論に補足して、テルトゥリアヌスは聖書からも引用し、

地獄において魂が責め苦を受けるとすれば、やはり物体性が必要となるとも述べている⁽³⁹⁾。炎による陰府の苛みは、魂の物体性がなければ単なる比喩 (imago) となつて、意味を持たなくなるからである⁽⁴⁰⁾。

また、魂が肉体を動かすのであれば、肉体と共に魂も物体でなければならないと彼は説いている。足を動かして歩き、眼を動かして見、手を動かして触れるという「運動」は、主体となる物体が客体となる物体を動かす関係でなければ成り立たないものとされている⁽⁴¹⁾。従つて、プラトンのように非物体的な魂が物的な肉体を動かすという思考は、彼には受け容れられないものである。このような運動論について、テルトゥリアヌスは誰の名も挙げていないが、ゼノンを初めとするストア派に特徴的な見解⁽⁴²⁾ であることは明白であろう。

2.6. 魂 と 死

人間の生命活動の停止後、魂は肉体から離れるとテルトゥリアヌスは捉えている。この肉体と魂の分離 (discretio) を、彼はストア派に倣つて「死」と呼んでいる⁽⁴³⁾。この死の状態と魂の関係を巡つて、彼は「輪廻」、「冥府」、「救済」に関する議論を行っている。

テルトゥリアヌスはピュタゴラス派の「魂の転移もしくは輪廻 (metensomatosis)」を取り上げて、彼らの言うように魂が死後、別の肉体に転移するとするならば、様々な点で齟齬をきたすと述べる。まず、死者の数と生まれた人間の数が一致していないと魂の「数量」が合わない。しかし、実際は、産業等の発達によって様々な民族の人口は増加している⁽⁴⁴⁾。また、仮に別の動物の魂が人間の魂に転移して、数の問題を解決しようとす

るならば、今度は「大きさ」が問題となる。象など巨大な動物、もしくは微小な生物の魂は、人間の魂と明らかに大きさが異なる。魂は肉体の全体に行きわたる必要があるが、それは恐らく困難となるであろう⁽⁴⁵⁾。

特にプラトンなど多くの哲学者は、魂が不死であつて、死者の魂が「冥府 (inferus)」に降る⁽⁴⁶⁾ と説いている。テルトゥリアヌスは基本的にその考えに賛同しながらも、その「救済」に関して異議を唱えている。彼らの教説では、哲学者や智者たちのみが、エーテルの高みや月へと引き上げられるという、特別な権利を所有している。こうした異教徒の教説とキリスト教徒の信仰との相違は、このような差別的な見解を見出すか否かにあると彼は捉えている。

「死に関して、異教徒 (ethnicus) とキリスト教信者 (fidelis) の違いを考察してみよう。慰め主 (paracletus) の助言に従つて神の御前で死を迎える (occumbo) ならば、死は暖かな熱気や柔らかな寝台の上ではなく、殉教における鋭い苦痛の上で (起こるものである)。あなたは自らの十字架を掲げ、それをもって主が教えたように、主に従うべきである。楽園への唯一の鍵 (tota paradisi clausis) は、あなた自身の血 (tuus sanguis) である。私たちの論考から、あなたは楽園についての見解を知るのであろう。それに従つて、全ての魂が主の日まで冥府に安全に留まり続けるという見解を我々は取っているのである」。(『魂について』55, 5)

死者の国には貧しい者の魂も、豊かな者の魂もあり、彼らは慰めと罰とを経験する。この地に留まっていた預言者や父祖たちは、キリストがこの冥府に降つたときに、天へと引き上げられた⁽⁴⁷⁾。

哲学者や智者に関わりなく、キリストにおいて死を受け入れる魂⁽⁴⁸⁾は、冥府に降った後に、天へと引き上げられるのである。

3.1. プラトン批判

ここまで見てきたように、テルトゥリアヌスの「魂」の議論は、多くの点でプラトンに対する批判を基盤として構成されていることが見出される。特に指摘すべき点は、その批判がプラトンにおける魂の「永遠」性と「非物体」性に向けられていることである。

魂が神の被造物ではなく、永遠に神と共に叡智界に在ったとする見解は、魂を「アダムに吹き込まれた神の息吹」と捉えるテルトゥリアヌスにとっては受け容れがたいものであったであろう。彼のプラトン解釈によれば、魂にアイデアを「観想（テオーリア）」することが可能なのは、それがもともアイデア界に属していたからである。テルトゥリアヌスがこのアイデアという概念そのものを否定していたかは明確にならない。神と共にあった「知恵」を、彼はフィロンの解釈したアイデアのように⁽⁴⁹⁾、神が創造以前に生み出したものとして理解していたようにも見えるからである⁽⁵⁰⁾。しかし、テルトゥリアヌスの思想においてアイデアに相当するものがあって、魂がそれを観想することが出来たとしても、それは魂の先在や永遠性によるのではなく、神の息吹としての魂における「理性的性質」に依拠しているからであると見なさねばならない。被造物である魂が「永遠」であるとは理解されないのである。

また、魂の物体性を否定するプラトンの見解は、テルトゥリアヌスの許容できるものではなかった。既に見たように、肉体の運動及び感覚は、それと結び付く魂が物体でなければ成り立たないと彼は

考えている。これに加えて、魂が可苦的であるためにも、魂は物体でなければならなかった。彼に拠れば、非物体であれば、受苦することは不可能であるからである。このことは、彼が肉と魂となったキリスト自身を物体として捉える根拠の一つとなった。受苦は魂において起こることであって、キリストの魂が非物体的であるならば、彼の受難は仮現論的な「見せかけ」だけのものになってしまうからである⁽⁵¹⁾。

ここでの神の物体性に関しては、単純に結論を導くのは困難である。後にアウグスティヌスが述べているように、テルトゥリアヌスは不変の神の御言葉が物体であるとまでは明言しなかった⁽⁵²⁾とされる。しかし、『プラクセアス反駁』では、神の霊が物体であることを否定しないとテルトゥリアヌスは述べている⁽⁵³⁾。ただ、指摘されなければならないのは、それが「独自のかたちにおける、独自の種類の物体（*corpus sui generis in sua effigie*）」であることである。これをストア的な固有の性質ではなく、「経綸の類比」として理解するならば、この物体性は神と被造物との連関を強調する類比概念であるとも捉えられる⁽⁵⁴⁾。

3.2. ストア的思考

『魂について』全般において、プラトンを批判する根拠としてテルトゥリアヌスが頻繁に用いているのはストア派の思考である⁽⁵⁵⁾。

テルトゥリアヌスが「しばしば我々のものであるセネカ（*Seneca saepe noster*）」⁽⁵⁶⁾や「ストア派を用いて申し立てをすると（*Stoicos allego*）」⁽⁵⁷⁾という言葉で語るストア派の魂論では、魂が「造られた」ことと、これが「物体」である点が強調されている。これは既に見たように、プラトンの魂論に対する反証として用いられている。魂が受

苦し、感覚を持ち、運動するためにも物体でなければならないという彼の議論は、ストア派との関係を抜きにして理解することは困難である。

この点に加えて、魂が肉体や性格その他様々なものを両親から引き継ぎ、固有の実体を担うという見解にも、彼はストア派のクレアンテスやクリュシッポスの名を挙げて同意している。また、魂が物質的な増減なしに、つまり増えることなく成長し⁽⁵⁸⁾、発展することに関しても、彼はセネカを引用してその意見を受け容れている。そしてその魂が死を迎え、死が魂と肉体の分離であり、死後は全てが終わるという主張に関しても、彼はストア派に同意するのである。

彼はもちろん、哲学全般に対する批判的態度を維持し、魂が分割できることや智者の魂だけが来たるべき時まで永続するというストア派の見解を誤りであると指摘している⁽⁵⁹⁾。しかし、その語調はプラトンに対するものに比べると、明らかに穏やかであって、ストア派の見解に同意し、それを論拠として引用する場面は多い。

3.3. 聖書的思考

テルトゥリアヌスはプラトン主義などの誤った魂観を指摘する際に、多くの点でストア派に依拠していた。これと同時に、彼は聖書に書かれた聖句を、論駁する際の根拠にもしていた。魂の起源が「神の息吹」であること、魂が宿る肉体が「神の神殿」であること、魂が死後に向かう冥府にキリストが三日間留まったこと、そしてアダムの罪が魂を通じて全ての人間に含まれていることなど、彼が聖書を論拠にしている点は多い。

しかし、幾つかの点で、彼が必ずしも聖書を至上の権威として議論を構成していたとは言い難いということは、指摘されるべきであろう。テルトゥ

リアヌスにとって、アダムとエバの罪は全ての人間にとって罪の源泉であった。しかし明白な「原罪」観はあっても、彼は殆どパウロには触れていない⁽⁶⁰⁾。魂が最初の人間の罪で汚れたという点は聖書的であっても、それが親から子へと物質的に性質を引き継いでいくという見解⁽⁶¹⁾は、むしろストア派の議論に近いと言える。また、肉体よりも魂そのものに、罪の源泉を認めようとする点も、パウロの解釈には類比されない。テルトゥリアヌスにとって肉体は罪を犯す主体というよりも、魂の付随物としての位置付けしか得られないのである。

また、テルトゥリアヌスが聖書に基づいて論じている箇所でも、ストア的とも呼べる思考が優先しているように見える場合もある。例えば、既に挙げた「金持ちとラザロの譬え」では、地獄の責め苦しの記述を根拠として魂の物体性が論じられているが、このような論じ方は若干恣意的にも見える。聖書の記述から魂の物体性が導かれたのではなく、むしろ物体性を論証するために聖書を引用しているからである。

もちろん、既に見たように、テルトゥリアヌスは聖書の権威を蔑ろにしているのではない。聖書の記述を拠り所とするマルキオンに対して、彼は聖書を頻繁に参照して論駁をしている⁽⁶²⁾。この『魂について』においては、哲学的思考、特にプラトン主義を拠り所とするヘルモゲネスに対して、聖書だけでなく哲学を参照しながら彼は論駁している。このような議論はタティアノス、テオフィロス、そしてエイレナイオスなどにも見られ、テルトゥリアヌスは過度にストア的と捉えられる側面を除けば、二世紀における護教家教父の伝統の上に立っていると言えるであろう。

4. 結 び

ここまで、テルトゥリアヌスの「魂」観の考察を試みた。彼は聖書に基づいて、神の息吹としての神的ではあるが被造物的性質、また蛇の誘惑とアダムの罪に由来する非理性的性質を魂の中に見出した。この魂が死後、肉体を離れて冥府で主の審判を待ち望むというのが彼の救済史的な枠組みである。

しかし、この構図を成り立たせている魂の性質は、反プラトン主義的な魂の単一性と不可分性、ここから得られる不死性と、彼が繰り返し強調する物体性であった。不死性は救済との繋がりから解釈することも可能であるが、物体性は感覚や受苦、運動といった側面から導き出されたものであり、ストア哲学を前提としていることは明白であった。

「魂」の概念に限定するならば、テルトゥリアヌスの議論はアテネとイェルサレムほど、哲学と聖書を切り離れたものではない。しかし彼の議論の先には、常にキリストによる救済を志向していたことは指摘されるべきであろう。

注

- (1) “Quid ergo Athenis et Hierosolymis?” (『異端者への抗弁』7, 9)。この句は、一般的にはテルトゥリアヌスが哲学を廃し、キリスト教的信仰の立場を優先したという文脈で引用される。また本稿で見えていくように、彼が特にプラトン主義に対して強い敵意を持ち、これに対峙するかたちで「信仰の規範 (regula fidei)」に依拠したことも事実である。しかし、彼の議論全般が、単純に「哲学」対「キリスト教」の構図に納められるのかというと、必ずしもそうではない。これについては様々な研究がある。例えば、ゴンザレスなどは、「アテネ」も「イェルサレム」もどちらも理性を含むとしている。ただ、アテネは事実が理性を一致させる「場所的、静的な理性」であり、

「イェルサレム」は理性が事実を一致させる「時間的、動的な理性」を表しており、受肉の出来事を受け容れることが出来るのは後者のみであるとしている。González, Justo L., *Athens and Jerusalem Revisited: Reason and Authority in Tertullian*, in: *Church History*, Vol. 43, No. 1, Chicago, 1974, pp. 22-23.

- (2) 『異端者への抗弁』7, 1-5。
 (3) 本稿では、ワズジンの校訂版を用いる。Tertullian, “Tertulliani De Anima”, in: *Opera Montanistica [Tertullianus]*, J. H. Waszink, Turnholt, 1954, pp. 781-869。
 (4) Dunn, Geoffrey D., *Tertullian*, New York, 2004, pp. 3-11。
 (5) 『魂について』9, 4。
 (6) ex materiae potius...quam ex dei flatu (『魂について』1, 1)。
 (7) この中には古代自然学派、プラトン主義など多くの哲学者が含まれるが、ストア派だけでも8人(ゼノン、クレアンテース、クリュシッポス、パナイティオス、アポロパネス、ポセイドニオス、アポロドロス、セネカなど)の名が挙げられていることは注目すべきであろう。
 (8) テルトゥリアヌスはプラトンの『パイドロス』と『パイドン』を何度も取り上げて、魂が生まれなき永遠のものであるという教説を批判している。留意すべき点は、プラトンが後に『ティマイオス』の中で魂が「造られた」ことについて論じている箇所(『ティマイオス』34.B-37.Cなど)については、テルトゥリアヌスは全く触れていないということである。『魂について』では『ティマイオス』の参照箇所は殆ど皆無であり、例えば『護教論』でテルトゥリアヌスは一箇所(46, 9)参照しているが、それも「宇宙の創造者を知ることは困難である」という一般的に有名な文章である。
 (9) ここでテルトゥリアヌスに帰されている「靈魂伝遺説」や、後にオリゲネスに帰される「靈魂先在説」などに関しては、ケリーの著作を参照。J. N. D. ケリー『初期キリスト教教理史 下 ニカイア以後と東方世界』拙訳、一麦出版社、2010年、120-122頁。
 (10) ut praefati sumus, quia animam ex dei flatu, non ex materia uindicamus, (『魂について』3, 4)。
 (11) et flauit, inquit, deus flatum uitae in faciem hominis, et factus est homo in animam uiuam, (『魂について』3, 4)。
 (12) 『魂について』16, 1。

- (13) これは、プラトンの魂観に類比される。プラトンも魂を理性的なものと非理性的なものから構成されると述べているが（『魂について』16, 1）、この構図自体についてはテルトゥリアヌスも同意している。しかし、その内実は、神の息吹を理性的要素と捉えるテルトゥリアヌスのものとは異なっている。
- (14) 『魂について』14, 2; 14, 3.
- (15) この議論そのものは、プラトンの著作の中で語られている（『パイドン』78C）。
- (16) しかし、後でテルトゥリアヌス自身が指摘しているように、ストア派は全ての魂が永遠に存在するとは述べていない。智者の魂は月まで引き上げられるが、その他の魂は大燃焼まで生きるとされた（『魂について』54, 2. cf. 『ストア派断片集』810.b など）。
- (17) 『魂について』14, 2.
- (18) しかし、古代のストア派では、むしろ「プネウマ」に基づく一元論的な魂観があったと捉えられている。Colish, Marcia L., *The Stoic Tradition from Antiquity to the Early Middle Ages*, Leiden, 1990, pp. 27-28.
- (19) 『魂について』14, 3. 尚、この魂と部分に関する議論に続いて、テルトゥリアヌスは「魂 (anima)」と「精神 (animus)」の議論も行っている。ここでは、魂が物体的な対象を認識し、精神が知性的な対象を捉えると説くプラトン主義に対する批判が展開されている（『魂について』18, 10-13）。
- (20) 『魂について』10, 2.
- (21) 『魂について』10, 7.
- (22) 『魂について』10, 3.
- (23) 事実、これは彼の論駁相手のヘルモゲネスが指摘していた点であり、ヘルモゲネスは魂が神からではなく、不完全な質料からやって来たとして理解していた。尚、「霊」と神の「息吹」については、テルトゥリアヌスは『マルキオン反駁』2, 9, 1-3 においても議論を展開している。
- (24) コリントの信徒への手紙一 15 : 46 など（『魂について』11, 3）。
- (25) テルトゥリアヌスはこれを「教会における（霊的な）賜物 (charismatum in ecclesia)」(コリントの信徒への手紙一 12 : 1) として捉えている（『魂について』9, 4）。
- (26) 『魂について』27, 2.
- (27) 『魂について』53, 5.
- (28) 『魂について』40, 2.
- (29) マタイによる福音書 5 : 28.
- (30) テルトゥリアヌスの『偶像礼拝論』では、これに「欲望 (悪への)」をも含めて、原罪に繋がる議論を展開している。cf. K. バイシュラーク『キリスト教教義史概説 下』, 掛川富康訳, 教文館, 1997年, 36頁。
- (31) A. A. ロング『ヘレニズム哲学 ストア派, エピクロス派, 懐疑派』, 金山弥平訳, 京都大学学術出版会, 2003年, 258-270頁。
- (32) 『魂について』6, 6.
- (33) アウグスティヌス『創世記註解』10, 26, 44.
- (34) 『魂について』31, 1-3.
- (35) この点について、彼はセネカの議論を引用している。
- (36) 『プラクセアス反駁』28, 8-9. cf. Wolfson, H. A., *The Philosophy of the Church Fathers; volume I, Faith, Trinity, Incarnation*, Massachusetts, 1956, pp. 387-388.
- (37) 『魂について』5.1-4.
- (38) Igitur anima corpus ex corporalium passionum communione（『魂について』5, 5）.
- (39) ルカによる福音書 16 : 23-31 に述べられている「金持ちとラザロの譬え」（『魂について』7, 1-2）。
- (40) 「不合理なるが故に、我信ず (credibile est, quia ineptum est.)」（『キリストの肉について』5）も同様に、彼の反哲学的な立場を表していると一般的には考えられている。しかし、これは神が人間となり、受苦し、死んで復活したことについての議論が背景にある。テルトゥリアヌスは、受苦の議論を見ても明らかなように、哲学や理性によらない妄信的な立場を押し通した訳では決してない。cf. Osborn, Eric, *Tertullian, First Theologian of the West*, New York, 1997, pp. 48-64.
- (41) 『魂について』6, 2-3.
- (42) これについては、キケロが『アカデミカ後書』39 で伝えている。cf. 『ストア派断片集』I. 90.
- (43) 『魂について』51, 1.
- (44) 『魂について』30, 2.
- (45) 『魂について』32, 6-7. 魂の大きさに関する議論は、プラトンの『パイドン』70, E-71, Bの中にも見出される。テルトゥリアヌスは、あくまで物体的な視点で議論をしているので、両者は平行線を辿る。
- (46) テルトゥリアヌスは、この節に関しても『パイドン』を参照している（『魂について』54, 4）。『パイドン』15以降では、魂がハデスに存在し、生きる者が生じてくるのは、死せる者からであるという仮定を巡って議論が展開される。
- (47) 『魂について』55, 4.
- (48) テルトゥリアヌスがここで描いている魂の表象

- は、北アフリカのカルタゴで殉教したペルベトゥアである（『魂について』55, 4）。こうした殉教の姿が、異教徒であったテルトゥリアヌスを回心へと動かしたと捉えるのが一般的であったが、バーンズのように、そもそも彼が改宗者であったこと自体に疑義を向ける説もある。cf. Barnes, T. D., *Tertullian: A Historical and Literary Study*, 2 ed., Oxford, 1985, pp. 245-247.
- (49) フィロンはこのアイデアが、創造の六日間が始まる第一日より更に前、つまり「一つの日」に創られたとしている。『世界の創造について』13-20.
- (50) Wolfson, 1956, pp. 264-267.
- (51) ここには、プラトン主義だけでなく、それに影響を受けたテルトゥリアヌスが考えるグノーシスやマルキオンの仮現論に対する批判が含まれている。cf. テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』3, 11, 1 など。
- (52) アウグスティヌス『創世記註解』10, 25, 41. これは恐らく『魂について』の議論を踏まえての評価であろう。
- (53) 『プラクセアス反駁』7, 8-9.
- (54) この議論は、更に別の機会に詳細を論じる必要があるであろう。今回は佐藤氏の論文に依拠して、概略をまとめた。佐藤吉昭「質料と神——ヘルモゲネースとテルトリアーヌスをめぐって——」『聖トマス学院論叢——V. -M. プリオット師献呈論文集』, 聖トマス学院編, 1977年, 113-118頁。
- (55) テルトゥリアヌスとストア派を巡る研究史に関しては、ウィルハイトの研究を参照した。Wilhite, David E., *Tertullian the African: An Anthropological Reading of Tertullian's Context and Identities*, Berlin/ New York, 2007, pp. 22-23.
- (56) 『魂について』20, 1.
- (57) 『魂について』5, 2.
- (58) この誤りについては、アウグスティヌスが鋭く批判している（『創世記註解』X, 26, 44-45.）。
- (59) 彼がプラトン主義だけでなく、ストア派とも距離を取ろうとしている姿勢は、『魂の証言について』などにも見出される。「だが私は、学校で教育され、図書館で訓練され、アッティカのアカデミア〔プラトン派の学園〕と柱廊〔ストア学派〕で養われたあなた（魂）を、つまり知恵のほとばしるあなたを呼び出しているのではない。単純無垢であり、知識によごされていない、まだ磨かれていない、単純素朴なあなたに私は答弁を求めているのだ」（『魂の証言について』1, 6）。
- (60) オズバーンが指摘しているように、原罪の鍵となる聖句（創世記5:3, 詩編51:5, ローマの信徒への手紙5:12など）をテルトゥリアヌスは引用しておらず、様々な点で後代の原罪論とは異なっている。Osborn, 1997, p. 167.
- (61) 既に見たように、一般的には「靈魂伝遺説（Traducianism）」と言われる。アダムの罪をキリストが引き継いだという点を、テルトゥリアヌスは否定している（『キリストの肉について』）。cf. 水垣渉, 小高毅編『キリスト論論争史』, 日本キリスト教団出版局, 2003年, 101頁。しかし、魂の非理性的な側面に含まれる、怒りなどの感情を、神が持っていたことについてテルトゥリアヌスは否定していない（『魂について』16, 3-7）。
- (62) 例えば、魂の議論に関しては『マルキオン反駁』2, 9, 1 など。